

Title	日本橋堀江町・小舟町商業史覚書：問屋と街
Sub Title	Historical Study of Commerce of Downtown in Tokyo, Case of Horie-cho and Kobune-cho, Nihonbashi
Author	白石, 孝(Shiraishi, Takashi)
Publisher	
Publication year	1998
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.41, No.2 (1998. 6) ,p.23-
JaLC DOI	
Abstract	本稿はこれまで本誌に所載した日本橋新乗物町・新材木町に続く商業史的視点にたつ問屋と街の歴史的素描である。江戸時代から明治・大正期に堀留川入堀に接していた堀江町・小舟町について、まずその由来や、江戸時代におけるこの界隈の町並みからこの街の特色を記述する。特に堀江町と小舟町の特色上の違いと照降町の店の略図をかかげ、その景観を明らかにし、江戸湊としての集散物産の中から米と鰹節をとりあげ、これらの問屋を検討する。更に、江戸後期の変貌をみて、明治に入り、鰹節商の小舟町における群生とその背景について、鰹節市場の拡大と
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19980600-00698131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本橋堀江町・小舟町商業史覚書

——問屋と街——

白石 孝

<要 約>

本稿はこれまで本誌に所載した日本橋新乗物町・新材木町に続く商業史的視点にたつ問屋と街の歴史的素描である。

江戸時代から明治・大正期に堀留川入堀に接していた堀江町・小舟町について、まずその由来や、江戸時代におけるこの界隈の町並みからこの街の特色を記述する。特に堀江町と小舟町の特色上の違いと照降町の店の略図をかかげ、その景観を明らかにし、江戸湊としての集散物産の中から米と鯉節をとりあげ、これらの問屋を検討する。更に、江戸後期の変貌をみて、明治に入り、鯉節商の小舟町における群生とその背景について、鯉節市場の拡大と産地を分析し、再び明治期におけるこの界隈の商業上の独自性をクローズ・アップする。これにより、「堀留」近辺の4つの町、新乗物町・新材木町・堀江町・小舟町のそれぞれの街の特徴を明らかにするものである。

<キーワード>

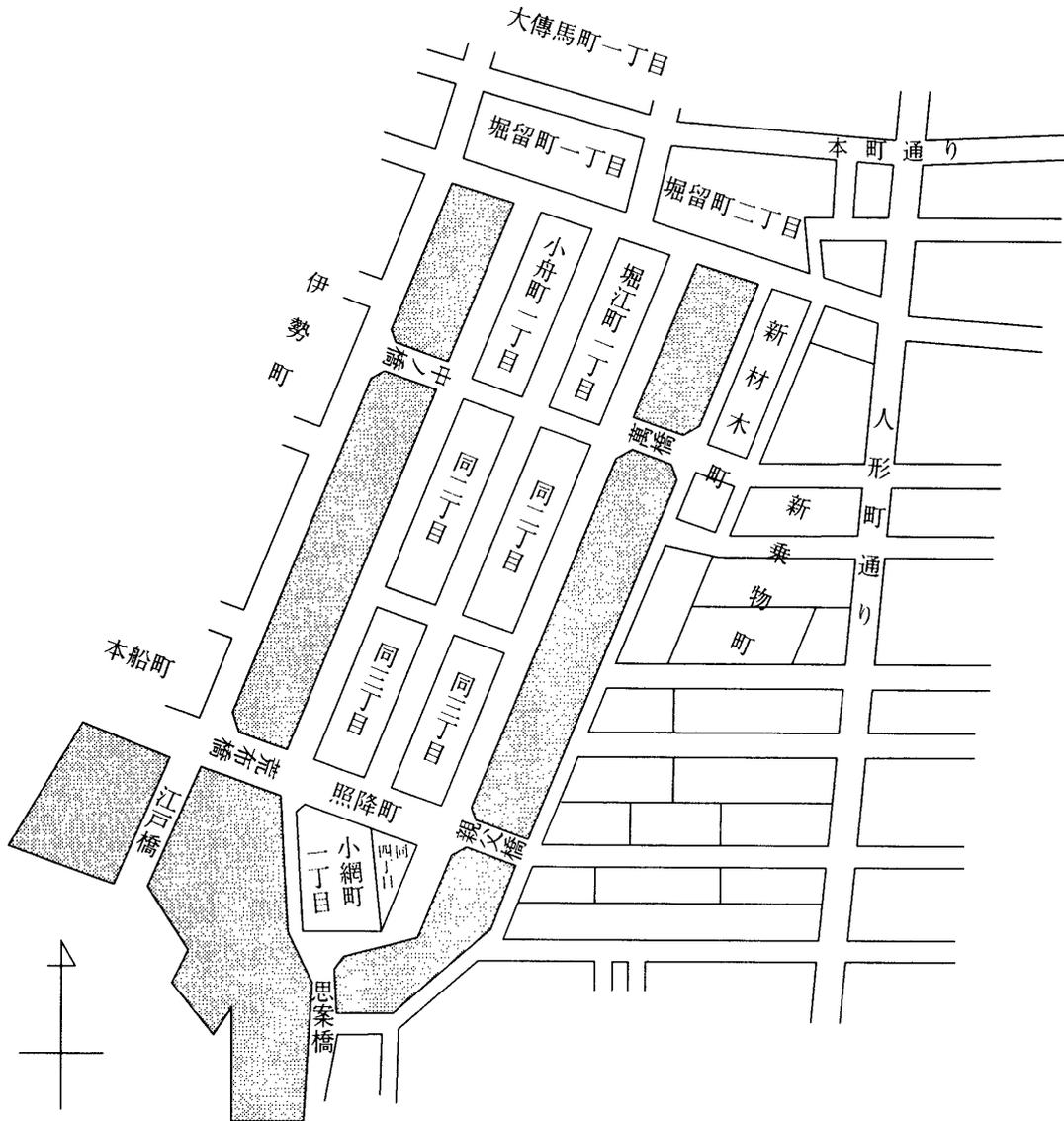
団扇河岸、米河岸、鯉河岸、照降町、商業圏、江戸湊、奥川筋船積問屋、地廻り米穀問屋、入堀浚い、改良鯉節、小舟町組、住吉組、下り鯉節、地廻り鯉節干肴問屋、荷引権、同質的商業構造

はしがき

前稿の新材木町商業史では、東堀留川がいかにかこの町を特徴づけていたかを記したが¹⁾、周知のように、堀留川は日本橋川から東と西の二本に分かれて開さくされており、図1-1のように、東堀留川の東河岸が新材木町、西河岸が堀江町で、西堀留川の方は東河岸が堀江町と背中合わせに小舟町、対岸に伊勢町があった。もっとも、この西堀留川は関東大震災の焼土ですでに昭和4年に埋められ、東堀留川は戦災の復興で昭和24年に埋められて公園となり、その上、今日では小舟町1丁目から3丁目、堀江町1丁目から3丁目は「小舟町」という単一の町名に統合されてしまっている。

1) 白石孝『日本橋新材木町商業史覚書』三田商学研究第40巻第5号

図1-1 小舟町・堀江町のロケーション（明治44年）



(すでにこの図には伊勢町堀はなくなっている。)

本稿は江戸・明治・大正の時代を通じて、この界隈の間屋や街が、どんな特徴をもち、どう変化してきたかを記すものである。新乗物町、新村木町の史的研究に続く試みである。

1 界隈の町並みとその特色

小舟町・堀江町は図1-1のように日本橋界隈の町々の中でも、そのロケーションは独特であった。北の堀留町1丁目から東西の堀留川に挟まれて突出し、南は日本橋川で囲まれ、丁度半島のよ
うな形をしている。東の新材木町には萬橋、新段町には親父橋で結ばれ、西の伊勢町には中ノ橋、
本船町に荒布橋、南端は小網町二丁目と思案橋で結ばれていた。この図にはないが、明治初年まで
は、西堀留川は北で西折し伊勢町堀に入り瀬戸物町に達していた。

町名の由来については、必ずしも定かではなく、「東京府志料」では、堀江町はここを埋築した名
主名によるとあり、また「日本橋繁昌記」や「中央区史」では、家康入国後、「この地を魚類の供進
を司らしめた魚夫堀江六郎なるものに給与したことによる」とある。小舟町の方は、対岸の本船町
が以前「大船町」と称していたことに対して名づけられたものという。ここでは由来そのものを改
めて問うつもりはない。むしろ、注目したいのは、これらの町名にしろ、由来らしきものをみて、
前稿までの「新乗物町」や「新材木町」のそれと全く異なっているという点である。殊に「新材木
町」が同じ堀留川に接し、様々な物資の集散地で、古くから材木の荷揚場となっていたことに由来
していたことと比べて、堀江町や小舟町という町名からは、特定の商業地帯を、その発祥に見出し
得ない。しかし、その代わりに、この界隈の河岸にはそれぞれの特徴を示す名がついていた。堀江
町の団扇河岸とか、小舟町の米河岸や鰹河岸（古称「^{あいの}醬河岸」）などである。²⁾また橋も、荒布橋のよ
うに、この辺りに荒布商が多かった故の名あり、更にこの荒布橋から親父橋に至る大路につい
ても、³⁾雪踏^{せった}や下駄を売る店が多いところから「照降町」という俗称で呼ばれていたのであった。た
だ、なんといっても、この界隈の決定的な特徴は、江戸湊の中心的な荷揚場であったことである。

実際、河岸には「江戸名所図会」に描かれているように、土蔵がすき間なく立並び、多くの川舟
が往来し、河岸から道を隔てた町々には多種多様の問屋が店をもっていた。

表1-1は旧幕引継書目録にある「諸問屋名前帳」から作成した堀江町・小舟町、それに小網町
1丁目界隈の業種別問屋数比較である。⁴⁾もちろん、この名前帳には、同一商人が2つ以上の株仲間
に加入している場合もあるから、この問屋数はいわゆる看板名儀数のようなもので、実際の店（軒）
数を意味するものではない。ただこれにより、それぞれの町にどんな種類の問屋商いがあったかを
知ることができ、これによると、堀江町には、米屋、炭薪仲買、豊表荒物問屋が多く、新材木町の
場合と類似しているといえる。小舟町は同じ米でも下り米屋仲買や地廻り米穀問屋、豊表荒物問屋

2) 『日本橋繁昌記』（一名日本橋区沿革史）日本橋協会、大正2年

3) 近藤義休・瀬名貞雄『新編江戸志』安永2年、綿谷雪『考証江戸切絵図』三樹書房 昭和51年、p.203

4) 旧幕府引継目録『諸問屋名前帳』国立国会図書館

表1-1 嘉永4年の界限町別・業種別問屋数

問屋・仲買業種	堀江町	小舟町	小網町 1丁目
下り米屋仲買	0	4	4
関東米穀三組問屋	1	2	2
雑穀為登組	1	1	2
雑穀仲買	1	0	0
地廻り米穀問屋	3	5	1
米屋	5	3	1
茶問屋	1	0	0
下り鯉節	0	5	0
乾物問屋	0	3	0
糠問屋	1	0	0
竹木炭薪問屋	1	0	0
炭薪仲買	9	3	2
紺屋	1	0	0
下り水油問屋	1	0	0
地廻り水油	3	2	0
水油仲買	1	2	1
髪油問屋	0	2	1
堀留組畳表荒物問屋	7	3	1
住吉組荒物問屋	4	2	0
筥問屋	1	0	0
釘鉄銅問屋	1	0	1

「諸問屋名前帳」(嘉永4年)より
嘉永4年後の加入、譲渡、転居、休業除く

に加えて、後述の鯉節や乾物問屋などがあり、特色をみることができよう。

しかし、これだけでは、これらの町の商業活動や景観の特色を見出すには不十分である。いわんや、本稿で特に指摘したい東・西の堀留川の商業上の相違は明らかにされない。そこで、改めてよく利用される資料「江戸・町づくし稿」から、この2つの町、堀江町と小舟町の主な店を業種別に⁵⁾どの位あるかをみてみようと思う。

表1-2は文化10年頃のこの界限の町ごとの業種別問屋数である。もちろん、この「江戸・町づくし稿」は「江戸買物独案内」などから記されており、そこにある店がすべてでもなく、従って、この数は正確なものではない。ただ、江戸文化の爛熟期といわれる時代の堀江町と小舟町が「問屋と街」という視点から、どんな景観を持っていたかを知るには役立つといえよう。この表では堀江町1丁目の店に団扇としか記されていないが、このあたりは、既述のように、「団扇河岸」とよばれたほど、団扇問屋が集まって、堀江町の名物になっていたといわれる。伊場屋仙三郎(伊場仙)なども寛政4年に開業され、徳川家の御用商人でもあり、そのほか、時代は不明だが、伊勢惣、伊勢

5) 岸井良衛『江戸・町づくし稿』青蛙房、昭和40年

表1-2 文化10年頃の町別業種別問屋数

← (西) 小 舟 町	堀 江 町 (東) →
(1丁目) 釘鉄銅物, 下り傘 (4) 乾物 (2), 畳表 (4) 蠟燭 (2), 唐和菓種 奥川筋船積 (5), 絵具染草 色油, 水油仲買 (2) 麻苧, 明樽 線香, 菅笠 (3)	(1丁目) 団扇, 諸国茶 下り傘 (2), 畳表 (6) 下りそうめん, 奥川筋船積 麻苧, 線香 菅笠 (4)
(2丁目) 鯉節干肴 (3), 生布海苔 奥川筋船積 (3), 水油仲買 線香	(2丁目) 煙草入地紙, 菅笠
(3丁目) 諸国茶, 綿打道具 鯉節干肴 (6), 乾物 生布海苔苧屑, 水油仲買 (3) 麻苧	(3丁目) 水油仲買 (2), 下り塩仲買 雪踏傘下駄, 下り傘
	(4丁目) 穀物, 下り傘 (2) 草履 (2), 奥川筋船積 線香 (2), 下り雪踏 (2)

岸井良衛「江戸、町づくし稿」より作成、仲買と記したものを以外問屋。
飲食店、菓子店などをのぞく。()は数。但し業種共すべてではない。

金、伊勢林など数多くの店があったらしい。中央区史によれば、嘉永期には15軒を数えたという。⁶⁾
事実、ここでの団扇は「東 団扇」といわれ、「花のお江戸の名物」とさえうたわれるほどであっ
た。⁷⁾ もっともこうした店は「江戸買物独案内」をみると、2丁目の小山屋のように紀州蜜柑や小間
紙、略暦を、池田屋のように絵紙などをも扱っていたのであった。⁸⁾ ここに堀江町の特徴があるが、
更に表のように、3丁目、4丁目になると、雪踏や下駄、草履の店がめだつ。このあたりは「照降
町」という俗称があったように、独特の景観を持っていたらしい。それではここはどのような町並
みであったろうか。

これについて、具体的な商店名を入れた略図が2つある。1つは中央区史に所載されている嘉永
年間の鹿島万兵衛追憶記と他は安田善次郎全伝中の文久年間の図である。ここでは前者よりも詳し
い安田両替店附近図の方を図1-2に示しておきたい。⁹⁾ ただこれは作図の関係からか、荒布橋の位
置が少し北にずれているし、見易いように多少修正をしておいた。

こうしてみると、この通りは問屋街というよりは、足袋・べっ甲・袋物・砂糖・下駄・金物・呉
服・糸・合羽^{かっぱ}・菓子・煙草などの店のある商店街であったといえる。往来も繁く賑やかな通りで

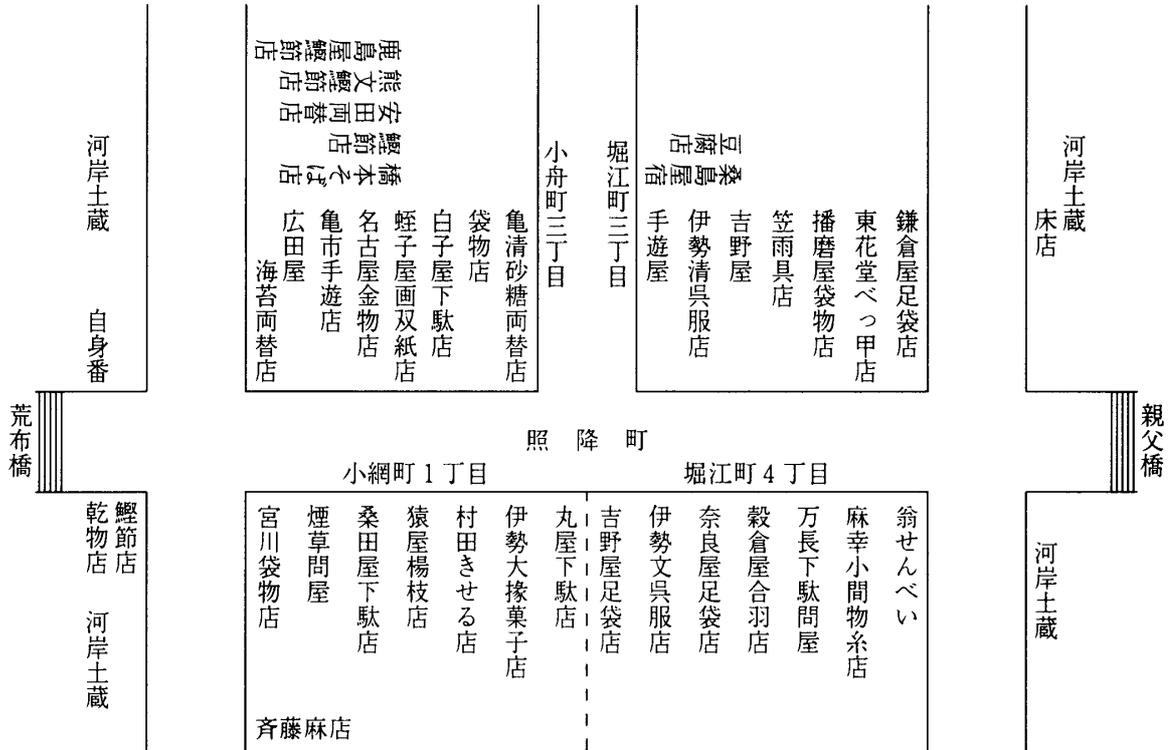
6) 中央区役所『中央区史』(上) 昭和32年, p.138

7) 日本橋二之部町会連合会『町のいしずえ』(日本橋二之部町会史) 昭和41年, p.152

8) 花咲一男編『東京買物独案内』(諸国買物調方記) 渡辺書店, 昭和47年

9) 富士銀行調査部『富士銀行百年史』昭和57年, p.13

図1-2 文久年間の照降町町並



「安田善次郎全伝」(富士銀行百年史)より修正写し 鹿島万兵衛追憶記参考

あった。それは本船町や江戸橋方面から荒布橋を渡り、この町を¹⁰⁾通って親父橋にゆく道筋で、そのすぐ先の葺屋町にあった芝居町への通り道であると共に、浜町あたりの大名が登城する際に通ったところでもあった。¹¹⁾また、この図にはないが、「寛天見聞記」には堀江町4丁目の翁せんべい屋の角を南に曲がったところには「船宿多し」とある。¹²⁾即ち、この辺は江戸各地より芝居町にくる客が利用した船宿が軒を並べていたのであろう。いわば、この照降町というのは、東西の堀留川という水路を利用した江戸の船積荷の揚場地帯の1部であり、他方では西は室町一本船町・本小田原町の商業圏と、東は人形町通りや葺屋町の芝居町周辺の商業圏とを結ぶ往来の賑やかな界隈だったといえる。

しかし、これから北の地帯、堀江町1・2丁目、小舟町1・2丁目になると、江戸湊らしい荷の集散問屋街の色あいが濃くなってゆく。これは表1-1と表1-2とをあわせてみるとよくわかるし、更に堀江町よりも小舟町にその色彩が強いことがうかがえよう。小舟町には下り米屋仲買、地廻り米穀問屋、竹木炭薪仲買、畳表・荒物のようなものの他、釘鉄銅物、蠟燭、薬種、色油、鯉

10) 東京都中央区教育委員会『中央区沿革図集』(日本橋篇)中央区立京橋図書館、平成7年、p.112

11) 高砂屋浦舟『江戸の夕栄』至誠堂、大正11年、p.239

12) 『寛天見聞記』(燕石十種第三)、国書刊行会、明治41年には照降町際から芝居町への略図が記載されている。

節、干着、生布海苔などがあり、また奥川筋船積問屋も1丁目に5軒、2丁目に3軒もあったからである。周知のように、江戸湊には上方から菱垣廻船や樽廻船で多種多様の「下りもの」が運ばれて来たし、関東各地からも「地廻りもの」が奥川船により廻漕されてきたが、小舟町にはこの地廻りものの荷揚げがかなり多かったといえる。奥川筋船積問屋が小舟町1・2丁目あわせて8軒もあったのもこれを物語るものにほかならない。

2 江戸湊・米・鯉節

奥川船は武蔵・野州・常陸・下総方面の水系を経て江戸にくる船で、深川¹³⁾の海辺大工町に着き、そこで荷物をほどいて^{はしけ} 舳で日本橋に送られてくる。この問屋が前述の奥川筋船積問屋で、伊勢町やこの小舟町あたりに集まっており、これらの川船は小網町の河岸や箱崎川あたりに碇泊して、日本橋の3分の2がこの船で埋められていたという¹⁴⁾。

これにより江戸湊に運ばれてきたものは、松前産の鮭・数の子・南部産の鱒メ粕・生鮪・鯉節・魚油・昆布のような海産物や米・雑穀・材木など多種にわたっている。しかし、なんといっても江戸湊への廻漕ものの主力は米であった。実際このあたりには多くの米問屋があった。これは小舟町1丁目に集中し、かつ小網町に多かったことから、改めて、これらの問屋をみると表2-1の如くである。

この表は嘉永4年とそれから幕末にかけての加入・譲受・廃業などのものを記したものである。これから次のような2つの特徴を見出すことができる。その第1はいずれの町においても、下り米屋仲買の増加よりも関東米穀三組問屋や地廻り米穀問屋の増加の方が顕著だったことである。それは米の上方依存の低下、陸羽米や地廻米などが着実に増えてきたことを反映したものであった。事実、小舟町1丁目では下り米仲買が4店から6店、小網町1丁目のそれが3店から14店に大きく増加したとしても、関東米穀三組問屋と地廻り米穀問屋あわせて、小舟町1丁目は7店から16店に、小網町1丁目にいたっては3店からなんと20店にまで増加していたからである。第2は幕末に米問屋は小網町1丁目に著しく増加したことである。下り米屋仲買・関東米穀三組問屋・地廻り米穀問屋の総数は、小舟町1丁目¹⁵⁾が表のように22店に対して、小網町1丁目には34店にものぼっていたのであった。即ち、江戸時代、船積輸送のため、米問屋の所在地は殆ど変化しなかったが、その中心は確かに変化をみせていた。小網町1丁目の米問屋の著しい増加もこれであるが、更に米取引の中心は深川に移って¹⁵⁾もいたのである。もちろん、これは江戸湊への米の送り先、産地の変化や廻漕の

13) この水路については鈴木理生『江戸の都市計画』三省堂、1988年、p.180

14) 東京市役所『日本橋』（東京市史外篇第6）昭和7年、p.197

15) 鈴木直二『江戸における米取引の研究』柏書房、1965年、p.201

表2-1 小舟町1丁目, 小網町1丁目米問屋 (嘉永4~幕末)

小舟町1丁目		小網町1丁目		小網町1丁目		小網町1丁目	
(下り米屋仲買)		⑮松坂屋徳兵衛		⑨美濃屋富三郎	安政4加入	⑳鹿島甚太郎	③
①飯村新八		⑯若狭屋和吉	嘉永5加入	⑩榊屋庄助	"6"	(地廻り米穀問屋)	
②吉川屋栄吉		⑰玉屋新兵衛		⑪伊勢屋太郎	文久7"	㉑伊勢屋佐吉	⑤
③江戸屋庄兵衛		⑱奈良屋	嘉永5加入	⑫柳屋八蔵	元治元"	㉒銭屋伊助	文久3譲受
④島田屋清七		⑲伊勢屋房蔵	元治元"	⑬田中屋長吉	慶應元"	㉓新井屋金太郎	"2加入
⑤川越屋喜兵衛	安政6加入	㉔多喜屋甚平	慶應2"	⑭伊勢屋竹之輔	"元"	㉕上野屋大助	"2譲受
⑥内田屋清兵衛	慶應2加入	㉖伊勢屋恵三郎	"3"	(関東米穀三組問屋)		㉗榊屋善蔵	"3加入
(関東米穀三組問屋)		㉘金屋善蔵	"3"	⑮久住伝吉	安政2転入①	㉙楯屋誠三郎	慶應2"
⑦飯村新八	①	小網町1丁目		⑯田丸屋半次郎	元治元譲受	㉚鍋屋平助	"2"
⑧島田屋清七	④	(下り米屋仲買)		⑰丸屋勝次郎	慶應元"	㉛中村屋定七	"3"
⑨吉川屋栄吉	嘉永5加入②	①久住屋伝吉	安政4転店	⑱三倉屋東七		「嘉永諸問屋名前帳」より。 加入・譲受無記入のものは嘉永 4年時の問屋。表1-1はこの 数。	
⑩常陸屋大助	"5"	②大穀屋正助	嘉永7休業	⑲蔦屋卯八	嘉永5加入		
⑪田島屋松兵衛	"7"	③鹿島屋甚太郎	万延元加入	⑳境屋辰次郎	安政3"		
(地廻り米穀問屋)		④笹屋鉦太郎		㉑和泉屋忠次郎	"5"		
⑫上総屋吉五郎		⑤伊勢屋佐吉		㉒榊屋庄助	"6"		
⑬釜屋源右衛門		⑥堺屋辰次郎	安政3加入	㉓明石屋卯三郎	慶應3譲受		
⑭能登屋七兵衛		⑦山屋喜五郎	"4"	㉔川越屋喜兵衛	万延2加入		
		⑧上総屋清蔵	"4"	㉕伊勢屋太郎助	元治元"		

経路, それに次第に上昇をみせた運賃などの社会的な影響を反映したものであったが, 他面では, 以前から問題であった堀留川の潮の干満時の水位の差が大きいという悪条件も加わってきた結果でもあった。この点からしても, 小網町河岸の方が条件が良かったことは事実である。しかし, このあたりですら, 荷物運送者が芥船を繋いでおき, 船の上で芥を選り分け積み移したりするものだから, 芥が入堀に落ちたりして, 大雨でも降ろうものなら, 芥土砂などが吐き出され堀が埋まってしまう始末で, 船が通れず, 度々入堀浚いをせざるを得なかったのであった。¹⁶⁾ こうしたことは, 江戸湊の中心として開さくされた東西堀留川の機能を大きく制約するものであったといえよう。

このように, 小舟町1丁目, 小網町1丁目には米問屋が多く, 上方や関東・東北より米が廻漕されてきて賑わったが, 小舟町2丁目や3丁目になると, そのおもむきを異にし, 経節問屋が多く, これらの町の特色をつくっていた。もっとも, 独立の専門経節問屋をみるに至ったのは寛延年間で, それまでは, 江戸十組問屋として紙問屋仲間に入れられ, 紙や葉種・雑貨などと一緒に扱われていたにすぎなかった。¹⁷⁾ 寛延年間に鯉河岸の問屋の手で「経節小舟町組」という仲間組合が漸くでき上る。しかし, これらの店でもやはり塩干魚と一緒に商われていたのであった。

鯉は, 周知のように, 古くから主に煮て日乾にした上で食べられていたが, 腐敗を防ぐため火乾にするようになり, 更に煉乾という製法に改良される。延宝3年頃, 紀州熊野浦の漁夫が土佐沖で釣った鯉を宇佐浦でこの改良鯉節にしたのがこの嚆矢とされるが, これから薩摩に伝わり, 遅れ

16) 東京都『東京市史稿』(産業篇第18), 昭和49年, pp.677-678

17) 東京経節問屋組合『かつをぶし』昭和13年, p.154

て、天明の頃に房州千倉に、更に伊豆・三陸方面に伝播していったといわれる。これは鰹釣漁業や鰹節製法の先進地域紀州の北上传播史として注目されよう。¹⁸⁾それ故に、鰹節はなんといっても紀州・土佐・薩摩が本場で、これらは大阪の鰹節問屋の手によって江戸に廻漕されてくるのであった。実際、寛文元年、大阪では鰹節問屋は4軒、正徳年間では7軒と記録にある。¹⁹⁾

そこで江戸の鰹節は、2つのルートから供給されてくる。1つは大阪の問屋を経て送られてくる「下り鰹節」、他は漁法や製法の伝播にともなって産地となった房州・三陸方面からの、すでに述べた奥川筋内川江戸廻漕のもの²⁰⁾とである。その結果、寛政年間に「下り鰹節」の「浜吉組」が生まれて、「地廻り鰹節塩干肴問屋」の「小舟町組」に分かれることとなった。特にこの浜吉組は下り鰹節専門の問屋達で大店が多かった。それは本場の品位の高い鰹節は取扱金額も大きく、産地からの荷引権・買付権を取得しなければならなかったからである。それにしても、江戸で様々な鰹節を扱う問屋が多く生まれてきたのは、鰹節が保存食料として風味豊かなものであり、かつ縁起ものとして祝儀用などの贈答品にも広く用いられるようになったこと、また既に述べたような産地拡大などによるものである。

それでは江戸時代にどのような鰹節問屋があったろうか、この界限における「小舟町組」と「浜吉組」とを合わせた文化10年の江戸十組の「鰹節塩干肴問屋」は次の表2-2のようである。ここでは東西堀留川地区として、北の堀留町1丁目と伊勢町堀に接していた瀬戸物町を加え14軒がリスト・アップされているが、表の注記のように、嘉永4年時での住吉組については○印を、更に3軒名を下に記しておいた。この鰹節問屋は江戸全体で文久10年では34軒であったが、このうち14軒もまとまってこの界限にみられたのは珍しく、やはり、このあたりの特色といつてよかろう。このような問屋が産地に進出し、漁村の海産物の産出・流通に直接関与した例は多い。この表にある小舟

表2-2 界限の鰹節塩干肴問屋（文化10年江戸十組）

町名	店主名	町名	店主名
堀江町1丁目	壺屋忠兵衛	小舟町2丁目	中村屋彦兵衛
" 2丁目	三河屋兵衛		油屋五兵衛
小舟町1丁目	大阪屋久兵衛	" 3丁目	遠洲屋新兵衛
" 2丁目	山中屋徳兵衛	" "	虎屋彌三郎
" "	榎坂屋宇兵衛*○	" "	大阪屋武兵衛
" "	住吉屋伊兵衛○	堀留町1丁目	清水屋八郎右衛門
" "	村田屋伊兵衛	瀬戸物町	伊勢屋伊兵衛○

嘉永4年浜吉組問屋○印。これに小舟町1丁目川村屋庄左衛門、小舟町2丁目榎坂屋定七、同3丁目尼屋伝次郎が加わる。*は文久3年4月廃業。

18) 農商務省水産局『日本水産製品誌』岩崎美術社、1983年、p.275、またより詳しくは平尾道雄『土佐藩漁業経済史』高知市民図書館、昭和30年、p.115

19) 山本高一『鰹節考』筑摩書房、1987年、pp.143-144

20) これについて詳しくは細井計『近世漁村と海産物流通』河出書房、1994年、pp.307-308

町2丁目の油屋五兵衛とか3丁目の大阪屋武兵衛も三陸沿岸の漁村地帯に直接に進出した問屋の1つである。²¹⁾また瀬戸物町の伊勢屋伊兵衛店(今日のにんべん)は宝永の頃は小舟町にあり、松平加賀守などの干着御用商人であったが、享保年間に大阪の鯉節問屋須磨屋三郎右衛門、岩国屋喜兵衛などからの仕入ルートを確立し、下り鯉節問屋として、大阪や熊野方面の産地に近いところから大量に買付けるに至る。もっとも、下り鯉節問屋の扱う1級品の鯉節は大部分が大名家用であった。しかし享保の不況期になり、こうした問屋も「徳用節」(標準品)をも扱うようになって、商品系列が広がっていった。²²⁾とはいえ、他の地廻り鯉節問屋と異なり、依然として大阪からの「下りもの」であった点に変わりはない。

こうして堀留川、特に西堀留川河岸と小舟町1・2・3丁目は、江戸湊の一角として物の集散賑々しく活力にとんだ町並みをつくっていた。それはこの界隈の地価にも反映されている。玉井哲雄「江戸町人地に関する研究」でも「主要な堀に面した河岸地のある町屋敷が高い」という例にあげられている通りである。²³⁾延享沽券図の小間高表示から、小舟町1・2・3丁目、小網町1・2・3丁目の中屋敷で小間当り250両から300両程度もし、角屋敷ともなると700両以上という本町通りよりも高値を示していた。これに対して、東堀留川に面した堀江町1・2・3丁目や前稿にとりあげた新木材町はやや低値で、中屋敷で小間当り200両程度であったから、同じ堀留川でもその接する町の地価は、明らかに西高東低ということになる。まさに、それは町の商業的価値の違いを示していたといえるであろう。

3 明治期の堀江町と小舟町の特徴

それでは明治になってこの界隈はどのように変わっていったのだろうか。

もちろん、東西堀留川はそのまま船の廻漕による物資の集散に便宜な役割を果たし続けていったことは事実である。町の景観もそう変わりなく残ってゆく。永井荷風の随筆「日和下駄」はこの姿を実に巧妙に写し出している。

「日本橋を背にして江戸橋の上より菱形をなした広い水の片側には荒布橋、つづいて思案橋、片側には鎧橋を見る眺望をば、其の沿岸の商家倉庫及び街上橋頭の繁華雑沓と合せて、東京市内の堀割の中にて最も偉大なる壮観を呈する処となす。殊にお歳暮の夜景の如き橋上を往来する車の灯は、沿岸の燈火と相乱れて徹宵水の上に揺き動く有様、銀座街頭の燈火より遥かに美麗なり」と。

まさに江戸時代とそう変わらぬ景観が依然として続いていたといえよう。もちろん、経済・商業

21) 前掲書 p.6

22) 現代経営研究所編『かつお節物語』にんべん、昭和54年、pp.145-149

23) 玉井哲雄『江戸町人地に関する研究』近世風俗研究会、昭和52年、p.34

表3-1 明治13年小舟町鯉節商名

<小舟町1丁目>	① 小林 治兵衛
① 川村庄左衛門	① 奥村 治兵衛
① 伊勢屋伴助	① 竹内彌右衛門
① 宮下平吉	加藤文右衛門
<小舟町2丁目>	① 榊原伝次郎
① 井上伊兵衛	桜井庄八
① 靱山久八	森田喜助
① 小柳永太郎	石井市蔵
① 西田半七	山本甚兵衛
① 前橋新助	太田新七
① 横田宗右衛門	金子平右衛門
① 靱山豊次郎	加藤文吉
① 靱山半三郎	① 岡崎長右衛門
阿部永兵衛	山崎彌兵衛
石原萬助	(以上28店)
<小舟町3丁目>	
① 佐久間小七	

「東京商人録」明治13年より作成。①は問屋。

的にはこの界限は時代の波の中で様々な変貌をとげる。なかでもめだっているのは鯉節商の群生であった。表3-1のように、明治13年、この小舟町界限の鯉節商（問屋と小売）は28店にもなっている。当時、東京中でこの商いが一番多かったのは日本橋で、48店、このうち半数以上がこの小舟町にあったことから、いかにこの界限に鯉節商が集中していたかがわらう。しかも、小舟町の2丁目・3丁目の地主の多くはこの鯉節問屋であった。小舟町2丁目1番地から11番地までの地主11名中、7名が鯉節問屋で、また3丁目も同じく11名中の8名がそれであった。²⁴⁾表にはないが、瀬戸物町の鯉節問屋の老舗高津伊兵衛（にんべん）もこの小舟町に2ヶ所も土地を所有していた。その意味でも、この小舟町2・3丁目は名実共に鯉節商の街といってよかった。

明治13年、江戸時代からあった前述の「浜吉組」と「小舟町組」とは合併し、明治20年に「東京鯉節問屋組合」となる。

明治になってこのように鯉節商が増加した背景は、いうまでもなく、鯉節市場の質的变化と拡大であった。江戸時代、すでに述べたように、鯉節需要は増加したものの、品位の高い「下り鯉節」は、その大部分が大名家御用達品であり、市場は質的に固定していたといえる。確かに町人の間で祝儀用などが普及したが、ごくこれも限られた範囲で、販売される鯉節の品位の差が大きいことからする市場制約はまぬかれなかった。土佐・薩摩の二産を以て鯉節の中の佳品といわれ、その品位

24) 『明治9年地主名鑑』東京名書林、明治9年9月21日

は鰹の回遊が東海では末端になるためもあり、また製法上の技術からも不良という評価を受けていた。品位の順は土佐—阿波—紀伊—志摩—駿河—伊豆—相模—安房—下総—常陸の順で、磐城や仙台ものは更に劣るといわれた。²⁵⁾これを反映して、小舟町組に対し「下りもの」を扱う浜吉組の力の差は歴然としていたといえる。

しかし明治になり、まず大名家に固定していた需要が一般市場に開放、拡大していった。保存高級食料から更に調味料として使用されることになって、また需要は飛躍的に増大し、品質それ自体も産地の技術改良普及によって、向上し、比較的品位の良いものが市場に多数現われるに至る。特に、この技術改良は、それまでは藩の政策などにより閉鎖的であったのが、地方の産業振興策として積極的に先進地域からの伝習に努めることになり向上していった。明治30年の第2回水産博覧会の報告書でも、いかに各県が先進技術地・高知からの伝習を計ってきたかが記されている。²⁶⁾その結果、鰹節産地は拡大し、産地別にみた生産高も次第に変化してゆくのであった。表3—2は明治期における主要産出県の生産高の推移である。これにより、明治期の鰹節産地はやはり高知・宮崎・鹿児島のような先進地域がベースになっているが、他方では岩手・福島・宮城の奥州系と、茨城や千葉の関東系とが著しく伸長をみせ、次いで静岡が台頭してゆく姿をみることができよう。と同時

表3—2 鰹節主要県別生産高（貫）

県名	明治17年	27年	37年
岩手	152,866	107,366	165,795
福島	157,683	99,235	74,584
宮城	128,344	92,475	172,255
茨城	76,417	414,932	106,001
千葉	386,950	126,761	77,405
神奈川	597	3,000	2,560
静岡	67,592	117,953	177,786
三重	47,265	68,678	91,160
和歌山	21,565	42,793	34,141
愛媛	1,268	24,049	29,240
徳島	8,273	15,972	29,215
高知	229,377	133,660	216,443
長崎	55,470	85,056	57,325
熊本	—	18,200	11,800
宮崎	128,344	92,475	172,255
鹿児島	79,646	138,294	182,784
沖縄	—	—	6,860

農林統計，山本高一「鰹節考」p.111 参照。

25) 農商務省水産局，前掲書，p.276

26) 山本高一，前掲書，pp.103-104

表 3-3 町別・業種別店数 (明治31年)

小 舟 町	堀 江 町
(1丁目) 米, 砂糖 (3), 畳表 (2) 荒物 (2), 絵具染料, 呉服, 菓子 (2) 綿糸, 乾物, 板紙, 運送業, 宿, 回漕, 席貸	(1丁目) 団扇, 米, 豆腐小, 畳表 (3), 銅鉄, 呉服太物 (2), 絵具染料, 綿布, 刺子, 銀行, 株仲買, 木綿
(2丁目) 銅釘金物, 下駄, 荒物 (2) 絵具染料 (2), 水油, 紙, 呉服木綿, 青物乾物, 煙筒, 鯉節 (4), 海産物, 宿	(2丁目) 団扇 (2), 酒 (2), 砂糖, 手拭, 糸, 傘, 荒物 (2) 毛墨, 絵具染料 (2), 魚, 扇子石鹼, 宿 (2)
(3丁目) 酒・醬油, 砂糖 (2), 鋤物, 縄蓆, 洋織物, 乾物, 海草, 銀行, 質, 鯉節 (5)	(3丁目) 米, 砂糖, 草履, 荒物, 蠟燭, 茶小, 手巾, 呉服太物 (2), 木綿 乾物, 運送, 宿, 菓子
	(4丁目) 下駄 (2), ベッ甲, 桐油, 宿 (2), 綿糸, 料理

「日本商工営業録」より。小は小売, その他は卸小売。

に, この産出高の推移は明治期における鯉節市場の急速な拡大を物語るものである。

明治における小舟町界隈のもう1つの特徴は, 江戸時代からの伝統的な商業に加えて, 新しい業種の店が生まれてきたことである。特に, それは明治30年代に顕著になったものである。表3-3は小舟町とこれに対比するための堀江町の業種別店数である。これをみると, やはりこの2つの町は江戸時代以上に, その特色を異にしている。堀江町の方が, 昔からの団扇・傘・糸・手拭・草履・下駄・ベッ甲, それに日用食料関係の豆腐・魚などの店があり, 下町の商店街の色彩が濃く残っていたのに対し, 小舟町の方は更に多様な業種の問屋街の様相を強めていたかの如くである。

新しい時代的業種に呉服太物・木綿・綿糸・銀行などが両方の町に店を持つようになるが, 規模の上で, 堀江町1丁目の綿糸問屋・紙屋や4丁目の糸問屋・紅屋鹿島万兵衛店, 小舟町1丁目の綿糸問屋・糸屋平沼八太郎店を除いて, 多くは零細な店であった。しかし, すでにこの時期には, 人形町通りは織物問屋街化し, 新興の金巾・モスリンのような洋反物問屋が本店に成長したばかり²⁷⁾か, 東堀留川対岸の新材木町ではすでに大きく変貌して, 織物問屋の店が数多く現われてきていた²⁸⁾。それだけに, この界隈の町としての変化は, 周辺動きと関連しなかった, かなり独自性の強いものだったといえる。

27) 白石孝『日本橋堀留・東京織物問屋史考』文眞堂, 平成6年, p.64

28) 白石孝 前掲論文『日本橋新材木町商業史覚書』p.36

それではこの境界の独自性はどこから生まれてきたものであろうか。

第1はこの境界は江戸湊として様々な物資の集散地として栄え、水路を通して諸国と接し、外に開かれた構造をもつ町であったこと、第2は東西堀留川にはさまれた半島のようなもので、隣接の地と隔てられていたこと、第3は唯一の地続きになる北の堀留町1丁目は、河岸をもつ町のように、境界と同質的な商業構造をもち、明治になっても変化に乏しい町であったこと、第4は堀江町の町並みが江戸以来の伝統的商業地として栄え、名物となった諸商いがすっかり定着してしまっていたこと、第5は小舟町が対岸の本船町と一線を画した鯉節や海産物問屋の拠点として栄え、明治になって更に一層その市場が拡大し、この商いから資産の増殖が可能であったことなどである。

それだけに、大正・昭和と時代が進むにつれ、また堀留川入堀がなくなるに及んで、この境界は全くその特色を喪失してしまうのであった。

<追記>

本稿は明治期になってからの新興商人と店の分析が不十分である。特に、安田銀行の設立は確かに小舟町の新しい姿として記すべきであるが、その社史的文献はあっても、街との係わりようが記されていないので、ここで触れなかったその他の業種、殊に糸問屋などの史的な足跡などと共に後日の稿としたい。